

No.164

2011.
2.1

岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111

博物館はどこへ行く

半原版画館 糸魚川淳二



1972(昭和47)年、瑞浪市化石博物館の建設にかかわって以来、博物館との付き合いが続いている。本来の地質学・古生物学と博物館・博物館学との2足の草鞋をはいて今日までやってき

た。博物館づくりの面白さを覚え、その後の一年間の滞欧生活で経験したヨーロッパの博物館見学が私にこの方向を選ばせたのである。

それ以来、いくつかの博物館の計画・建設にかかわり、多くの博物館を見て、私なりに博物館・博物館学についての考えをまとめ提示してきた。その中で感ずることのひとつは社会の流れの大きな変化である。1970年代から80年代への高揚期には多くの博物館がつくれ、瑞浪市化石博物館は地方の、専門的小博物館のモデルとして評価された。その後、各県には県立の大型博物館が生まれ、一方、地方の各種の中小の館も増え、現在では日本博物館協会に所属する館で約4000あるといわれ、質量ともに、世界的に高いレベルにある。

そして、大から小まで、総合館から単科の館まで、美術館から動植物園まで、研究・収集を主とする館からレジャー的な館まで、その内容はさまざま、多様な形で存在している。例えば展示という側面から見ても、「もの」を見せるという昔からのやりかたから始まって、模型や動くものを使う方法、さらには参加型の展示まで、バラエティにこんだ形を見ることができ、利用者は自分の好みに合った館を選び楽しむことができる。まさに博物館多様化の時代といえよう。

こうしてみると、明治の初めに博物館が日本へ入ってきて以来約140年、現在の日本の博物館は全盛期、順風万帆といえそうであるが、果たしてそうであろうか。

最近の日本社会は混沌としていて不安要素が重

なり、先が見えないといわれる。財政的な危機はいろいろな面でわれわれの生活を脅かしている。行政の予算不足はいまや定常化し、特に文化的な側面でのしわ寄せが著しい。博物館についても例外ではなく、むしろ集中的であるやに見える。それは博物館つぶしや統合、人減らし、収集費の削減など、さまざまな形で現れている。

こうした中で、博物館はこれからどこへ行くのだろうか。どのように考え、運営して行ったらよいのだろうか。その形・活動の形が多様であるから、いろいろな捉え方があるだろう。それぞれの立場でベストを尽くすしかないが、私は次のように考え、提案してきた。それは「包括的」ということである。包括的博物館として、包括的な活動をするということである。

「包括的」(comprehensive)とはどういうことであるか。「分化」したものを「総合する」ことである。最初にこの考えが頭に浮かんだのは「展示」においてであった。パリのフランス国立博物館の「進化の進行」や滋賀県立琵琶湖博物館の「湖の環境と人びとの暮らし」などにヒントを得て生まれたものである。簡単に言えばいろいろな「もの」・「こと」を素なるものへ分化してとらえ、それらの要素を有機的・選択的に結合して総合することである。

この考えは「展示」で具体的に表現することができ、それだけでなく、博物館のさまざまな活動においても活用でき、ひいては博物館全体の活動にまで及ぼすことができる。固定的な形にはまったものでなく、フレキシブルなファジイなものである。

この考えは「包括的展示論」(瑞浪市化石博物館研究報告 no.35(supplement),2009年)、「包括的博物館—21世紀の博物館像—」(同上 no.36, 2010年)としてまとめた。参考にして頂ければ幸いである。

博物館の未来を開くために、なにをしたらよいか考え行動すべきときである。手を携えて前進したい。

第75回 岐阜県博物館協会 会員研修会 報告

テーマ「ワークシートの学びをデザインする」

日時：平成22年10月13日（水）

会場：岐阜県現代陶芸美術館 プロジェクトルーム

講師：木下 周一氏（有）コミュニケーションデザイン代表

日本ミュージアム・マネジメント学会会員、日本展示学会会員

参加者：25人

講師の木下氏はグラフィックデザイナーとして30年近く、ミュージアムの解説計画やサイン計画と、そのデザインを専門としてこられた。デザイナーとして、また教育普及の観点から、ワークシートの学びについて講義をして頂いた。



最初に、木下氏は参加者に対して「使えるワークシート」とはどのようなものか、という質問をされ、参加者は日頃のワークシート制作の経験をもとに様々な意見を述べた。

次に「ワークシートのミッション」として、神奈川県立地球市民かながわプラザを例にとり、ワークシートの役割について述べられた。そしてミュージアムでの教育の特徴について、また現在の学習者像について述べられた。次に、千葉中央博物館生態園の実施するワークシートの例をあげられた。学習者の解釈と展示意図について、設問・回答方法はワークシートの目的に合わせて考えるということ、回答に至った過程を重視するということである。

さらに、教育環境はどうあるべきかについて、また子どもの「経験」の重視というお話をされた。またコミュニケーション・交流については、ミュージアムの解釈と学習者自身の解釈の出会い、学習者の批判精神が、ミュージアムのミッション達成にもつながると話された。

講義の後半では、事例報告として、アクアト岐阜、岐阜県博物館、美濃加茂市民ミュージアムの3館の報告があった。それぞれにワークシートの役割、学習者、運用方法などきちんと考えられた有用なワークシート制作をされていることがうかがえた。



その後、再び木下氏から、ワークシート制作のデザインの基本についてお話を頂いた。いくつかの館のワークシートから読みやすさ、見やすさ、楽しさなどの面で参考になる実例を見せて頂いた。また、アメリカの教育プログラム制作段階評価であり、デザインの指標となる5つの力を紹介された。「評価」ということに関しては、フォローの場はワークシートの評価材料の宝庫であるということ述べられた。利用者の反応とじかに接することで制作者の反省（ふりかえり）ができるという。



最後に、ミュージアムでは、ミュージアム資料・資源を活かしワークシートを制作するが、利用にあたっては「学びの自由」を保証するということが、つまりミュージアムにしかできない学びをすることが重要であると述べられて、講義を終わられた。

今回の参加者にはワークシート制作に日常的に携わられている方も、そうでない方もいると思われるが、木下氏のご経験や各館の事例をお聞きすることで今後の博物館活動をすすめるにあたり、有益な時間となった。

（機関紙委員 光記念館 吉井隆雄）

第35回東海三県博物館協会研究交流会報告

日 時：平成22年10月28日 13：00～

会 場：三重県亀山市青少年研修センター

参加者：49名

第35回東海三県博物館協会研究交流会が、平成22年10月28日(木)、三重県博物館協会の主催により、亀山市青少年研修センターにて開催されました。参加者数は開催県の三重県を中心に計49名でした。



三重県博物館協会の中村幸昭会長による主催者あいさつ等の後、同協会の杉谷政樹事務局長より今回のテーマ「博物館が進める地域との連携」について、「地域との関わりの中で博物館がどのような活動を展開し、また多様な機関や地域の人々とのような関係を築いていく必要があるのかを考えた」旨の趣旨説明がありました。

つづいて、計4件の事例発表がありました。

愛知県からは見晴台考古資料館学芸員・伊藤厚史氏から「見晴台考古資料館の市民発掘」について発表がありました。昭和39年の第1次調査以来の歴史を通して、市民の主体的な活動として定着しているという成熟性が印象に残りました。

岐阜県からは岐阜県博物館学芸部・浦崎太郎が「郷・豊夢!プロジェクト～ストーリー性ある地域教育プログラムの自力開発支援～」について発表を行いました。

博物館に対する逆風に対して「岐阜県民が実物や実体験を通して郷土の価値を発見できるようにする」という方針を打ち立て、その具現策として、県内各地の機関や団体等と連携してアウトリーチ事業について展開してきた経緯を報告。最近、学校教育がもつ「学習素材をプログラム化して子どもの意識を段階的に高める技法」を小中学校区規模の社会教育に応用し、子どもや大人の意識が無理なく

変容する仕組みとして考案した「地域発!ふるさと学習プログラム」について実績を紹介しました。また、三重県からは、まず亀山市歴史博物館学芸員・小林秀樹氏から「亀山市歴史博物館のITを利用した亀山市史編さん事業」について発表がありました。同市では歴史博物館が市史編さんを担い、そのための調査活動を通して市民との関係が深まり、撮影した映像は館のデジタルアーカイブに、借用した資料や調査の成果はそのまま博物館の企画展にもつながる、という実績の紹介がありました。

つづいて、亀山宿語り部の会会長・川戸真一氏から「亀山市域での語り部活動と地元博物館への期待」について発表がありました。会員は歴史博物館が発信する専門的な情報の恩恵を受け、歴史博物館は語り部の紹介により来館者が増える等、互恵的な関係が成立しているという報告が印象的でした。

その後のポスターセッションも含め、博物館と地域の連携には様々な可能性があること、そして館をとりまく環境に応じて各館が地域とより良好な関係を構築できるように努力している様子を知ることができ、とてもよい刺激になりました。



閉会后、多くの参加者は隣接する亀山市歴史博物館を見学し、事例発表で聞いた成果を展示室等で確認し、理解を深めました。また、会場を閉ロジに移しての交流会では、県を越えて夢を語りあうことができ、東海三県交流会の存在意義を実感することができました。

(機関紙委員 岐阜県博物館 後藤秀樹)

第123回岐阜県博物館協会公開講座報告

特別講演

「円山応挙 流派の成立とその展開」

期 日：平成22年7月17日（土）

会 場：下呂交流会館マルチスタジオ

講 師：京都嵯峨芸術大学教授 佐々木正子氏

参加者：約30人



下呂ふるさと歴史記念館では、円山応挙に師事した武川維章、維章に師事した青木玄章という、二人の郷土出身絵師を紹介する特集展「『写生画』円山派-武川維章と青木玄章-」が開催され、関連イベントとして円山応挙研究の第一人者である京都嵯峨芸術大学教授の佐々木正子氏による特別講演が行われました。

佐々木氏は、筆遣いや画風を修得するために手本の臨模を重視した狩野派に対し、応挙が生み出した「写生画」は対象物を観察してその姿をありのままに再現するという、当時としては画期的な手法であったことを説明されました。

また、応挙が生み出した「写生画」が広く受け入れられた背景には、当時流行した実学（博物学・本草学等）の流行がありましたが、応挙はそれに留まらず、様々な手法を駆使して対象物の生命感・情感などまでも表現しようとしたことをスライドや映像を交えながら解説されました。

さらに、講演終了後も特集展会場に移動して展示作品の丁寧な解説もあり、受講者からは活発な質問があるなど非常に充実した講演となりました。

（機関紙委員 瑞浪市陶磁資料館 砂田普司）

第125回岐阜県博物館協会公開講座報告

「歳のせいにはしてはいけない病気の話」

期 日：平成22年11月27日 14：00～

会 場：内藤記念くすり博物館

講 師：日本医科大学武蔵小杉病院 内科学准教授 北村 伸氏

参加者：176人



財団法人田口福寿会、十六銀行、大垣共立銀行、岐阜信用金庫の協賛のもと、第125回岐阜県博物館協会公開講座が、内藤記念くすり博物館大ホールにて開催されました。

講座の初めに、当館の館長 長縄 厚雄氏よりご挨拶がありました。続いて、日本医科大学武蔵小杉病院 内科学准教授 北村 伸氏による「歳のせいにはしてはいけない病気の話」というテーマの講演がなされました。講演内容は、認知症やアルツハイマー病について、脳のCT画像やMRI画像を用いて、大変わかりやすくご説明されました。ふだんは目にすることのないこれらの画像と、病気の症例を照らし合わせたお話に、参加者は熱心に耳を傾けていました。

講演の最後には参加者からの個人的な体調不安、たとえば「左手に力が入らない」「声がかすれて大きな声でしゃべることができない」などといった質問に対して、大変丁寧に、優しくお答えしていらっしゃいました。

参加者数は176人と大変多く、大ホールは高齢者を中心にほぼ満席状態で、市民の健康に対する意識の高さがうかがえました。

（機関紙委員 岐阜県世界淡水魚園水族館 堀江 真子）